



国立大学法人
豊橋技術科学大学

IT食農だより

発行元：豊橋技術科学大学 先端農業・バイオリサーチセンター

住所：〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1

TEL: 0532-44-6655 FAX: 0532-81-5108 E-mail: manager@recab.tut.ac.jp

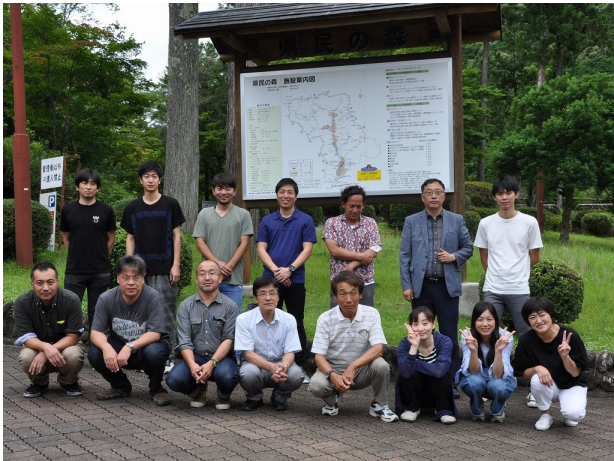
2019年9月15日

No. 69

夏季研修と第4回先端施設研修、先端IT農業研修の実施

7月21日(土)～22日(日)の2日間にわたり、夏季研修が愛知県民の森(新城市)で行われ、植物工場マネージャー7期生9名と土地利用型IT農業コース3期生6名が参加しました。初日は、先端施設研修として豊橋市東七根町の「㈱松浦園芸」のコチョウラン栽培を視察し、青い色素で、染色したコチョウラン等を見学しました。その後、もつくる新城で昼食及び農産物の販売状況を視察しました。その後、愛知県民の森で、プログラム受講検討会を行い、受講生からeラーニングと、課題研究の進捗状況が報告され、質疑応答や意見交換を通じて活発な議論が行われました。

2日目は、先端IT農業研修として新城市中宇利の「福津農園・松澤政満氏 自然農



夏季研修参加者の集合写真(愛知県民の森)

法のほ場」を見学しました。ここでは、松澤さんが自然農法を始めたきっかけや、栽培に関する考え方についてお聞きしました。松浦さんのほ場では、鶏も飼育されていました。特有の臭いがなく、また、湛水されている場所が各所にあるのにもかかわらず、蚊がほとんどいないことなど、驚かされることが多くありました。そこでは、受講生からの熱心な質問や意見交換が行われました。(文責：山内高弘)

第36回オープンキャンパス公開シンポジウムと植物工場見学ツアーを開催!

8月24日に第36回豊橋技術科学大学オープンキャンパスが開催され、先端農業・バイオリサーチセンターでは、公開シンポジウム「農工融合研究と地域農業のスマート化の展望」と学内の植物工場の見学ツアーを実施しました。シンポジウムでは、浴俊彦センタ―長の挨拶に続き、高山弘太郎教授(エレクトロニクス先端融合研究所)が「農業生産への植物生体情報の適切な実装戦略」、山内高弘特任准教授(先端農業・バイオリサーチセンタ―)は「韓国における太陽光利用型植物工場の進展と課題」と題して講演しました。続いて、当センタ―で実施している人材育成講座の修了生である富永陽市氏(富永農園、IT食農先導士3期生)が「トマト、ミニトマトにおける環境制御の実践」、吉武進氏(㈱InfinitD、6次産業化7期生)が「平面大面積定格以外の農業用ド

ローン開発と運行システムの構築」と題して、現在の取り組みを報告しました。会場から植物生体情報計測システムや農業のスマート化の課題に関する質問があり、有意義な議論が行われました。公開シンポジウムに47名、植物工場の見学ツアーには103名(午前：52名、午後：51名)が参加し、スマート農業、植物工場への関心の高さを実感しました。(文責：熊崎 忠)



公開シンポジウムの様子

とよしん食農セミナー開催

7月11日(木)に豊橋信用金庫主催のとよしん食農セミナーが豊橋技術科学大学にて開催され、農家や農業関連企業など110人が参加しました。第一部ではIT技術で「生産者」と「都会のレストラン」をマッチングするプラッ

トフオーム「SEND」を運営するプラネット・テールブル^(株)の創業者である菊池紳氏が革新的な流通の仕組みや、創業の経緯などについて講演されました。続く第二部では高山弘太郎教授（エレクトロニクス先端融合研究所）が植物診断技術とAIを活用した植物工場の必要性や現状について講演されました。その後、講演者を交えた交流会が行われ、38名が参加しました。（文責：加藤元志）

最先端植物工場マネージャー育成プログラム「教育給付金制度」の指定講座に認定

「最先端植物工場マネージャー育成プログラム」は厚生労働省が行っている「教育訓練給付制度（専門実践教育訓練給付）」を利用して指定講座の認定を受けました。

社会人が中長期的なキャリア形成に資するための専門的かつ実践的な教育訓練として指定を受けた講座を受講した場合、雇用保険の加入等所定の条件を満たした事業主・受講者に給付・助成が受けられる制度です。受講料や訓練期間中の賃金に助成が受けられますのでぜひ活用ください。

詳しくは厚生労働省HPをご参照いただくか、豊橋技術科学大学研究支援センター支援係、先端農業・バイオリサーチセンターまでお問い合わせください。（文責：加藤元志）

季節の花 ニチニチソウ

ニチニチソウ（ビンカ）、（学名：Catharanthus roseus）は、キョウチクトウ科の夏から秋に花壇や鉢植えで楽しむ草花です。本来は毎年花を咲かせる多年草ですが、日本では霜の降りる頃に寒さで枯れることが多いので、一年草として扱っています。

種子の発芽温度は高く22℃前後が必要です。あまり早くまきすぎても発芽まで時間がかかるので、4月下旬以降が適期です。発芽まで10日～14日ほどかかるので、乾かさないように気をつけましょう。種子は光が当たると発芽しにくい性質を持っているので、種子をまいた後は軽く土をかぶせて日陰で乾かさないようにします。直根性なので、あまり大きくなつてからの植え付けは根を傷めるリスクが高く、根付きにくくともあります。ビニールポットに種子をまいて、間引きながら育て、大きくなつたら土をくずさないように植え付けるとよいでしょう。植え付けは、日当たりの良い場所に行います。日照不足になると茎が間延びして倒れやすくなり、花付きも悪くなります。25℃前後でよく成長する植物で、野生のものは熱帯地域に分布します。乾燥に強く、湿気の多い場所をいやがります。水やりは土の表面が乾いてから与えましょう。過湿

にすると根腐れぐされして株がダメになってしまふことがあります。生育中は肥料は切らさないようにしましょう。苗の時期は一週間に1回液体肥料を与えます。7月以降は気温が上がりに、成長しますので肥料は欠かせません。ただし、チツソ分が多いと茎葉はよく茂りますが、花は咲きにくくなるので、その点は注意します。（文責：山内高弘）



旬の食べ物 巨峰(ブドウ)

巨峰は、日本で育成された生食用ブドウ品種です。大井上理農学研究所の大井上康氏が、ブドウ品種「石原早生」と「センテナアル」を交配した品種で、ヨーロッパブドウ（Vitis vinifera）のヴァニフェラ系

交雑種に分類されます。巨峰が開発されたときは「石原センテナアル」という品種名が付けられましたが、その後「巨峰」の名称で商標登録され、現在では商標名の「巨峰」が定着しています。巨峰は「ナガノパール」や「ピオーネ」などの大粒ブドウ品種の交配親にもなっています。巨峰は日本で最も栽培されている品種であり、全国各地で栽培されています。愛知県は巨峰の生産量全国4位で、巨峰の種なし技術を確立したのは愛知県が全国初と言われています。店頭で選ぶときは、果軸が太く青みがあり、粒の表面に白い粉（ブルーム）をふいているものが新鮮です。ハウス栽培の巨峰は6～7月に出荷され、露地栽培の巨峰は8月～9月に最も美味しい時期を迎えます。（文責：熊崎 忠）

